瓦の未来を考える

2018年 新春特別寄稿

民家再生に取り組む 建築家・藤岡龍介氏

㊦

民家再生に力を注ぐ建築家、藤岡龍介氏の特別寄稿「日本の民家と屋根、そして瓦の未来を考える」の後編をお届けする。本稿では民家再生の費用についても言及しているが、「瓦なんて再利用したからと言って、決して安く済むわけではない」「むしろ多くの手間と技術が必要」とする。では、なぜ再生なのかとの自問には、「そこには、現在では得られない“もの”と“時間”が詰まっている」「重層された魅力を伝統的民家は持っている」との見解を提示している。

（前号より続く）

半解体修理の工事は、まず素屋根や足場を掛けて、調査を始めます。屋根は基本的に本瓦葺きで一部桟瓦を葺いてありました。瓦に番付けして調査を行うのですが、どのような場所にどのような瓦を使用し納めているかを把握しながら、軒先、袖、谷、箕甲、壁際、棟などの納めをスケッチしていきます。

その建物は幾度となく手が加えられており、組み直しや明治後期には大きく座敷や仏間、茶室なども増築されていました。

瓦を見てみると、本瓦部分には多種類の瓦が使用されており、平瓦と丸瓦と軒瓦について種類と年代区分の調査を行いました。特にこの地域では江戸時代から建物に梁間規制があり、その中で内部空間をできるだけ広げるという工夫がなされ、屋根に微妙な反りを持つ鐙(あぶみ)葺きが特徴となっていました。

明治期に増築された部分はその時期に作られた瓦を使用し揃っているのですが、主屋部分の本瓦を下ろしてみると軒瓦や平瓦、丸瓦でも何種類もの瓦が認められました。

建物が直角ではなく、大きく角度が変わっていたので、よく見ると軒瓦の瓦が認められました。

瓦を細かく調べてみると、当初すべての瓦を新調していたのではなく、当建物を建て替える前の建物に葺いてあった瓦を解体時にていねいに下ろし、再利用していたのではないかと推定できました。平瓦は建て替え前の建物の瓦と、建て替えられた時の新調した瓦、そして丸瓦（飛鳥）は明治後期に作られた朝鮮の百済から寺院建築された奈良飛鳥の法興寺（飛鳥寺）は、造営時にいう利点のみならず、是非この様な魅力のあるとも言える概念では決して感じ得ることのできない美しさなのです。ただ単に瓦は寿命が長いと

⑤元青果問屋の町家。奈良町北端部京街道沿いに建つ奈良格子の付く町家の再生。三世代が快適に住み継ぐ

長期にわたり風雪に耐え、時間を経たからこその風合い

現代町家を創出する

なら・町家研究会立ち上げ

藤岡龍介氏

藤岡建築研究室（奈良市）主宰。1952年奈良県生まれ。2002～2007年近畿大学非常勤講師、2009年～京都市文化財（建造物）保存・活用マネージャー及び養成講座講師。（公社）日本建築家協会／NPO法人「古材文化の会」／NPO法人「木の建築フォーラム」／なら・町家研究会所属。受賞歴、研究、論文、報告書多数。

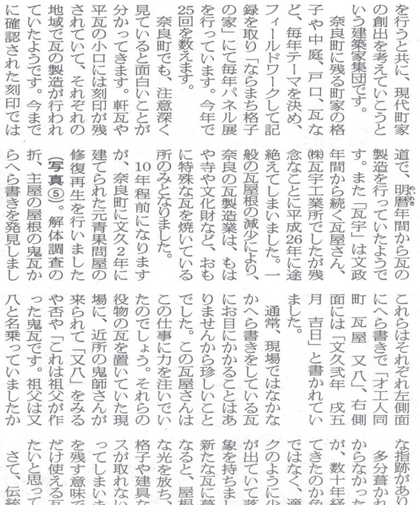
著書に「住み継ぐ／藤岡建築研究室の改修・再生と新築」（建築資料研究社）など。

⑥紀寺の家。奈良町に大正13年に建てられた長屋を再生。伝統的町家の魅力を活かし、豊かな暮らしを提案した

このように、瓦は長寿命な材料でなおかつ、簡単に1枚1枚取り替えられます。メンテナンスの瓦は、すでに高度な技術でられていたという事を物語っています。

ところで、皆さんもご存知だと思いますが、元興寺の本堂と禅室の屋根は1400年前に作られた行基葺きの瓦が葺かれており、今もお現役で雨漏り成から建物を守っています。これは驚くことで、時間を経てきたからこそ感じられる風合いであり、美しい表情を見ることができます。当時の瓦が長期にわたり風雪に耐え、分かってきます。軒瓦や平瓦の小口には刻印が残されていて、それぞれの地域で瓦の製造が行われていたようです。今までに確認された刻印では「瓦又」「瓦宇」「瓦利」「瓦儀」「坪吉」などがありました。恐らくすべて奈良の製造であると思われます。

「瓦又」は現在の㈱瓦又（飛鳥寺）と共に瓦づくりの技術がされ元興寺に移築された奈良飛鳥の法興寺（飛鳥寺）は、造営時にいう利点のみならず、是非この様な魅力のあるとも言える概念では決して感じ得ることのできない美しさなのです。ただ単に瓦は寿命が長いと



⑤元青果問屋の町家。奈良町北端部京街道沿いに建つ奈良格子の付く町家の再生。三世代が快適に住み継ぐ

現代町家を創出する

なら・町家研究会立ち上げ

このように、瓦は長寿命な材料でなおかつ、簡単に1枚1枚取り替えられます。メンテナンスの瓦は、すでに高度な技術でられていたという事を物語っています。

ところで、皆さんもご存知だと思いますが、元興寺の本堂と禅室の屋根は1400年前に作られた行基葺きの瓦が葺かれており、今もお現役で雨漏り成から建物を守っています。これは驚くことで、時間を経てきたからこそ感じられる風合いであり、美しい表情を見ることができます。当時の瓦が長期にわたり風雪に耐え、分かってきます。軒瓦や平瓦の小口には刻印が残されていて、それぞれの地域で瓦の製造が行われていたようです。今までに確認された刻印では「瓦又」「瓦宇」「瓦利」「瓦儀」「坪吉」などがありました。恐らくすべて奈良の製造であると思われます。

「瓦又」は現在の㈱瓦又（飛鳥寺）と共に瓦づくりの技術がされ元興寺に移築された奈良飛鳥の法興寺（飛鳥寺）は、造営時にいう利点のみならず、是非この様な魅力のあるとも言える概念では決して感じ得ることのできない美しさなのです。ただ単に瓦は寿命が長いと

⑥紀寺の家。奈良町に大正13年に建てられた長屋を再生。伝統的町家の魅力を活かし、豊かな暮らしを提案した

日本の民家と屋根、そして

残る棟梁の手の跡 地域の個性や時代性表現

⑦和歌山・九度山の町家。文具店だった町家を松山常次郎記念館に再生

“おとなしい瓦”求む

伝統構法での改修可能に

鬼瓦の上には鳥衾瓦を置きます。

鬼瓦は角張りで宝珠、巾着、福槌などの縁起物の形をつけ、穏やかで素朴な印象の屋根瓦です。

しかし、時代が近代に入り明治、大正、昭和初期となってくると、軒瓦の形や意匠にも新しさを求めて変化してきました。

鎌倉唐草でも無地の野郎唐草や蛇の目瓦、ベタ万十と言われる石摺瓦、一文字瓦、万十瓦と変わり、風切丸も素丸から紐丸になり、棟も角棧瓦から紐丸瓦に変わります。屋根瓦にも年代でそれぞれ特徴も見えてきて、時代性がわかり非常に興味深いものです。

奈良町家の屋根は、江戸時代の奈良名所図絵巻によると、板葺き石置屋根が描かれています。後に桟瓦に移行したと思われます。江戸後期からは発展していき様々なバリエーションが見られるようになってきました。そして明治の一部を飾っています（写真⑧）。

しかし、現代の建て替えで新品の瓦や、鋼板、セメント板などに変わり、瓦の葺き替えでも建物の時代と合わない形や約め、均一に仕上げることで、奈良町家の魅力が失われ、表情も固く感じられるようになってしまうことはとても残念に思います。

■改修時の瓦一手順と技術

町家や民家の改修について簡単に説明します。最初に建物の平面や断面、構造から、床下や小屋裏まで基本的なところの実測調査を行います。次に伝統構法で改修し、再破損の状態を調べていきます。どこの何がどのように傷んでいるのか、その年の建築基準法の改正により、柱の貫や仕口に加え、土壁の耐力による耐震性が計算可能となり、限界耐力設計法が認められるようになりました。従って伝統構法は伝統構法で改修することが可能になりました。

腐朽や蟻害などで使用できない材は、古材や新材で継いだり、又は取り替えたりして、基礎や軸部を健康体にしていきます。

しかし、伝統的な建物がすべて正しい技術で成り立っているかというとそうとは限りません。例えば、床下の柱と柱をつなぐ足固めを見るとよく分かります。

江戸期の建物はしっかりホゾを抜き、車知栓などで緊結していて問題はありませんが、特に大正期や昭和前期の足固めは、短ホゾを作り柱に入れているだけなので、一つ一つもすべて再利用はできませんから、見えない部分に新しい瓦を葺いていきます。新しい瓦は見える場所に葺いていくように思われがちですが、実は逆で、古瓦の方が風雪に耐えて、表情も良く建物に合うので見える場所に葺いていくのです。

壁に関してはしっかりしている壁は残し、厚さが薄い壁は新たに壁を塗り足して一体にして行きます。緩んでいる部分は竹小舞からやり直し、荒壁から塗っていきます。

さて、ここでお話したいのは再生の費用です。既存の柱や梁、壁や瓦を再利用したから言って、残念ながら決して安く済むわけではありません。多くの手間と時間と技術が必要で、実はおおよそ建て替える場合とて同じくらいかかります。

屋根瓦も同様で、既存の瓦を下ろし、再利用できるかどうかを調べ、葺き土と使用できない瓦は処分に出します。決して安く済むものではなく、結局、新しく瓦を葺き替えたのと同じくらいかかるのです。

それでは、「なぜ再生をするのか」です。現在では得られない「もの」「時間」がそこには詰まっているからです。その時代の住人の思いや考え、職人技術、つくる人たちの心の一つ一つが刻まれている家に手を入れながら暮らしていく、重層された魅力を伝統的民家は持っているのではないでしょうか。

屋根瓦もその建物の時代と共に変化してきました。

瓦は、既設で使用されていた古いものは正面のよく見える所に順に葺いていきます。古い瓦は必ずしもすべて再利用はできませんから、見えない部分に新しい瓦を葺いていきます。新しい瓦は見える場所に葺いていくように思われがちですが、実は逆で、古瓦の方が風雪に耐えて、表情も良く建物に合うので見える場所に葺いていくのです。

壁に関してはしっかりしている壁は残し、厚さが薄い壁は新たに壁を塗り足して一体にして行きます。緩んでいる部分は竹小舞からやり直し、荒壁から塗っていきます。

さて、ここでお話したいのは再生の費用です。既存の柱や梁、壁や瓦を再利用したから言って、残念ながら決して安く済むわけではありません。多くの手間と時間と技術が必要で、実はおおよそ建て替える場合とて同じくらいかかります。

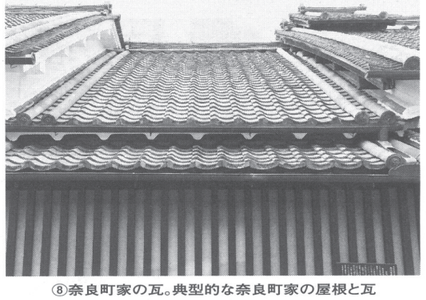
屋根瓦も同様で、既存の瓦を下ろし、再利用できるかどうかを調べ、葺き土と使用できない瓦は処分に出します。決して安く済むものではなく、結局、新しく瓦を葺き替えたのと同じくらいかかるのです。

それでは、「なぜ再生をするのか」です。現在では得られない「もの」「時間」がそこには詰まっているからです。その時代の住人の思いや考え、職人技術、つくる人たちの心の一つ一つが刻まれている家に手を入れながら暮らしていく、重層された魅力を伝統的民家は持っているのではないでしょうか。

屋根瓦もその建物の時代と共に変化してきました。

瓦は、既設で使用されていた古いものは正面のよく見える所に順に葺いていきます。古い瓦は必ずしもすべて再利用はできませんから、見えない部分に新しい瓦を葺いていきます。新しい瓦は見える場所に葺いていくように思われがちですが、実は逆で、古瓦の方が風雪に耐えて、表情も良く建物に合うので見える場所に葺いていくのです。

壁に関してはしっかりしている壁は残し、厚さが



⑧奈良町家の瓦。典型的な奈良町家の屋根と瓦

ブル（持続可能性）な材料で、これからも求められていく建築材、屋根材ということなるでしょう。

前述のように在来の方法として一般的に生産している銀色いぶし瓦は、葺いた当初は特に屋根全体がシルバー色となって非常に目立ち全体が固くなりがちです。再生の場合は、建物を印象づける屋根にはおとなしい瓦が求められます。

1998年から10年かけて国宝・唐招提寺金堂の解体修理が行われました。その際に古い瓦の色焼き方でユニット竈や流し、煙突などを焼いていました。現代の暮らしの中にも瓦で焼いたものが出てきてほしいと感じています。瓦という素材は多様であり、今後も必要なる物ではないと思いますし、なくしてはいけないと思っています。（了）

これらはそれぞれ左側面の指跡があります。

多分葺かれ時には分からなかったのでしょうが、数十年経ってからの出現です。

通常、現場ではなかなかいら書きをしている瓦を持ちました。これをもとから珍しいことでした。この瓦葺きはなると、屋根だけが均一な光を放ち、柱や梁、出たのでしょう。それらの役物の瓦を置いていた現場に、近所の鬼師さんがを残す意味でも、できるだけ使える瓦は再利用したいと思っています。

さて、伝統的な町家の屋根を形づくる瓦葺きは、軒先を飾る軒瓦、両袖のその鬼は屋根に後に鬼瓦の形や棟などの地域の個性や時代性を表現しています。とりわけ奈良町家の瓦の仕様は多様ではありますが、切妻平入り、厨子2階建ての基本的町家の屋根はさしてむく言っていました。「この瓦は瓦宇製で刻印が押してあるだろう。良い瓦だからまだまだ使える。当時瓦を葺いた葺師の手の跡が残っているだろう…」と。葺いた瓦に大いに役立つのではないでしょうか。それらの素晴らしさを維持しつつ、時代の技術を取り入れて再生を行っていきたいと思います。

■瓦の未来考

今一度、原点に立ち返って考えてみますと、山で育てた木を使い、土に還すまでを入れ腐らせ、壁に使う。土で瓦を焼いて屋根に葺く。人の手で造られた建物に何百年と暮らし続けていく。そして、朽ち果てれば土となって自然に帰っていく。今、自然との共生をはじめ、資源・エネルギーなどが改めて取りている銀色いぶし瓦は、葺いた当初は特に屋根全体がシルバー色となって非常に目立ち全体が固くなりがちです。再生の場合は、建物を印象づける屋根にはおとなしい瓦が求められます。

1998年から10年かけて国宝・唐招提寺金堂の解体修理が行われました。その際に古い瓦の色焼き方でユニット竈や流し、煙突などを焼いていました。現代の暮らしの中にも瓦で焼いたものが出てきてほしいと感じています。瓦という素材は多様であり、今後も必要なる物ではないと思いますし、なくしてはいけないと思っています。（了）